

<div>Super Standard</div> <div>スーパー・スタンダード</div> <div>Super Trio</div> <div>スーパー・トリオ</div>
<div>1. オール・オブ・ミー</div> <div>All Of Me (S. Simons)(5 : 23)</div> <div>2. バイ・バイ・ブラックバード</div> <div>Bye Bye Blackbird (R. Henderson)(7 : 15)</div> <div>3. チェロキー</div> <div>Cherokee (R. Noble)(4 : 50)</div> <div>4. クレオパトラの夢</div> <div>Cleopatra's Dream (B. Powell)(3 : 54)</div> <div>5. ドキシー</div> <div>Doxy (S. Rollins)(6 : 43)</div> <div>6. ミステイ</div> <div>Misty (E. Garner)(8 : 06)</div> <div>7. ストールン・モーメンツ</div> <div>Stolen Moments (O. Nelson)(5 : 46)</div> <div>8. サマー・ナイト</div> <div>Summer Night (H. Warren)(4 : 16)</div> <div>9. サンセット・アンド・ザ・モックンバード</div> <div>Sunset And The Mockingbird (D. Ellington)(5 : 28)</div> <div>10. スイート・アンド・ラプリー</div> <div>Sweet And Lovely (G. Arnheim, H. Tobias, J. Lemare)(5 : 42)</div> <div>11. ウィロー・ウィーブ・フォー・ミー</div> <div>Willow Weep For Me (A. Ronell)(6 : 13)</div> <div>12. イエスタデイズ</div> <div>Yesterdays (J. Kern)(3 : 01)</div>
<div>ケニー・バロン Kenny Barron (piano)</div> <div>ジェイ・レオンハート Jay Leonhart (bass)</div> <div>アル・フォスター Al Foster (drums)</div> <div>録音：2004年9月7日 アヴァター・スタジオ、ニューヨーク</div>

©© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

<p>*</p> <p>Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan. Recorded by David Darlington at Avatar Studio in New York on September 7, 2004. Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara. Front Cover：© Norman Parkinson Limited / Fiona Cowan / Corbis / Corbis Japan. Artist photos by John Abbott. Designed by Taz.</p>

なふうに気分も内容もぎっしり詰まっていたのが、ということがわかるのだ。

さて、今度はマニアの人に耳打ちしよう。

「ちょっと、ちょっと、ケニー・バロンがまあ、『オール・オブ・ミー』をやったんだよ。聴いてみたいと思わない？」

私は実際、二、三の人に情報を伝えてみたのである。すると彼らの反応は大きかった。なかには目の色が変わった人もいた。「えっ、あのおそ真面目なバロンが」と言って絶句するのである。

ピギナーの人に説明しておこう。「オール・オブ・ミー」という曲はスタンダードの初歩中の初歩曲である。もちろん曲の内容は深いが、とりえずヴォーカル・スクールなどへ行くと最初に歌われるのがこの曲だ。私のすべてを奪ってちょうだいという歌詞がついていて、けっこうハスッパなイメージでとらえられている。そのハスッパ曲を謹厳実直なバロンが採り上げたから、さあ驚いた。と、まあこういうわけなのだ。

そういう曲を1曲目に持ってきているあたり、そうとう曲者である。レコード会社の人。ご存じのように曲順というのはたいていの場合、演奏者が決めるわけではない。レコード会社がああでもないこうでもない頭をひねるものである。

さあ、マニアの方、どんなふうにお聴きになっただろうか。

意外におとなしいじゃないか、というのが大方のご意見だろう。曲が華美な割りには演奏は温和。それはそうだ。バロンにあらざる曲を弾いたとはいえ、そんなにこれまでと違う自分を見せられるわけではない。でも私に言わせれば、実にけっこうなバロンである。

最近バロンは別の会社から、ステフォン・ハリスのバイブを入れたコンボのCDを出した。ステフォン・ハリスという無機質なバイブを入れたあたりにバロンの特性がよく表れているが、やっぱり。なにやら機械みたいな演奏のCDだ。オリジナル曲も総じて地味で、メロディアスに花開かない。ひたすら霧の中から聴こえるような寒々しい曲、そしてプレイ。それに比べれば、いや比べるのもおかしいが、なんとこの盤は官能的に笑顔を浮かべているのだろう。無口なバイブ入り盤に比べ、こちらは笑顔盤。私がバロンに欲しかったのは官能である。色気である。笑顔である。

バロンはずっと立っているとなかなかの男前だ。この間亡くなった作家の水上勉は、65歳を過ぎてからがいちばんの男前と女性から人気だったらしいが、バロンだって負けてはいない。人間、色気が出れば演奏に色気が出て当たり前である。ちょっと油断するとすぐに無機質演奏に向かうのがバロンだが、ダメ、ダメ。年を取ったら色気の方向に行かなければ。

私は主題のあと、さあソロという時にベースがしゃしゃり出て独り舞台を演じるアレンジが好きではない。「オール・オブ・ミー」がそれである。しかしジェイ・レオンハートのベース・ソロがいやに張り切っているのだ。それはそうである。「オール・オブ・ミー」を演ろうと具申したのはジェイ・レオンハートその人なのだ。

張り切りベースのあとのバロンのソロが浮き立つようにすばらしい。テーマに戻ってそのテーマを最初のテーマと比べると、これがぜんぜん違う。血流がどんどんよくなったみたいに演奏が脈打っているのだ。

バロンは演奏しているうちに燃えてくるタイプの人である。だんだん徐々に熱くなってくる人だ。ドラムとベースが一体になってなかなか終わらないエンディングがいい。これなども最初の申し合わせにないものだろう。燃えて、もっと続けたい。しかしもう一回曲を繰り返すわけにはゆかない。ならばエンディングでせめて十分に燃えよう、と。

私は「サンセット・アンド・ザ・モックンバード」も楽しんだ。デューク・エリントンの作。曲名はなんとなく知っていたが、曲想は不明だった。私は今後このCDを取り出したら「オール・オブ・ミー」の次にこの曲のボタンを押すだろう。

ちなみにこの曲をやろうと発案したのはヴィーナスの人である。ミュージシャンたちは喜んだそうである。「いい曲を教えてくれた」と。

「オール・オブ・ミー」で熱くなって、この曲で少し冷ます。いい取り合わせである。諸君もやってみてはいかがだろう。オレは「クレオパトラの夢」と「ミステイ」だという人がいるかもしれない。別な人は「ドキシー」と「イエスタデイズ」かもしれない。「ミステイ」は最初ボサノバのリズムで演奏された。しかし会社の人がストップをかけた。「ミステイ」といえばボサノバという現代ジャズ演奏の定番スタイルはやめてくれ。きちんと伝統のっとして4ビート、バラード・リズムで伴奏してくれ、と。

私の大好きなドラマー、アル・フォスター。今回はさすがにケニー・バロンの伴奏だけあって派手な立ち回りはないが、要所要所細かいところで派手である。私はドラムがアル・フォスターというだけで、どんなトリオ盤も買ってしまおうが、この人が入るとどんなトリオも「普通でなくなる」からである。平板にスイングしない。全体のサウンドが「立つ」のである。

ちなみに今回の録音は最初、ドラマーにピクター・ルイスが予定されていた。それを変更にもっていったのはヴィーナスの会社である。いや、どうもありがとう。

私はこの盤をケニー・バロンは初めてという人に聴いてもらいたいと思う。さらにはケニー・バロンはもう卒業したというベテラン・ジャズ・ファンにも聴いていただきたい。

まずピギナーの人にちょっとお伝えしておこう。

ケニー・バロンというのはなかなかわかりづらいピアニストである。歴史上有名なピアニストは皆それぞれよくも悪くもスタイルというか、その人なりの特徴を持っている。バド・パウエル、ビル・エバンス、キース・ジャレットなどなど。もちろん、これらの人たちとあえて同等に位置すると言わせていただくが、ケニー・バロンもちゃんとした独自の弾き方や音を持った人だ。しかし、それらの特徴が小さいというか地味というか、一聴鮮やかに弾き方の違いが耳に飛び込んではこないのだ。

撰なミュージシャンである。撰といえば、バロンは1970年代だったか「スフィア」というグループを作ったことがあった。しかし、これがジャズ界でこれ以上地味なグループはあるかというくらいなもので、逆に評判をとったりしたのである。このグループの結成でますますバロンは「混迷の度合い」?を深めたりもした。

そうした中で1990年代の初めにレザボアというマイナー・レーベルから『ザ・モーメント』という作品が発表された。ルーファス・リードのベース、ピクター・ルイスのドラムスが加わったこのトリオ盤で、バロンはモヤの中から姿を現したのである。

2曲目に入ったスティングの「フラジャイル」。バロンというのはこんなにも透明度の高いピアノを弾く人なのか。曲への関心度が高い人なのか。私に言わせれば、バロンは「フラジャイル」という曲とともに現代にデビューしたのである。

そして今回のこのヴィーナスの一作。そうした意味でバロンはここに全貌を現したと言っていい。

バロンは曲でわかる人なのである。そうだ、思い出した。1980年代、オランダのレーベルでバロンは何を思ったか「リング追分」を吹き込んだのだ。これが実によかった。曲のよさと少しゴツゴツとしたタッチのピアノがバロンということになる。少なくとも私にとっては、地味な曲作りのオリジナルを聴いてもバロンは面白くない。

いやはや、やってくれたものである。曲で聴くバロンとは言いながら、これはまたなんという天下の名曲揃い。だからこそ私は冒頭で、まずもってピギナーの皆さんに聴いてもらいたいと要請したので。

例えば4曲目の「クレオパトラの夢」である。バド・パウエルのほとんど50年前の同曲の演奏を聴いたことのない人たちに耳にしてもらいたい。「ジャズってこんないい曲がある音楽なのか。やっぱりジャズは格好いい」

こう言って小躍りするだろう。レコード店の店内で流れれば雰囲気ウキウキ、たちまち在庫一掃に違いない。

ピギナーの人たちが十分楽しんだ後、私はこう言ってやりたい。「実はこの曲の入った古典盤があるんだけど。ブルーノートの『シーン・チェンジス』というんだ」

興味を覚えて聴いてみるだろう。すると彼女彼女はどう思うか。「いいけど、ちょっと古いかな。『白い巨塔』のオリジナル版みたいなものかな」

私はジャズの聴き方はこれでいいと思う。古典から現代に至るのではなく、今の空気を呼吸するミュージシャンの演奏を聴き、次第に古い時代に逆流する。「クレオパトラの夢」はまずリズムが新しい。そのためか演奏が開放され、ばらけている。そういう現代の演奏を楽しんでバド・パウエルを聴くと、1950～60年代のモダン・ジャズとはこん